

木杖之秋田

小島修一印著

北村実業協会出版部

大正七年出版

の擴張に着手し、製函機四臺を増設して之れが製材をもなし、年と共に事業盛んとなりつゝありて、現今に於ては職工十八人之れに従事し、植

一八二



秋田縣雄勝郡西馬音町内町西馬音町西馬音町西馬音町

夫人夫等一日六七十人を使役して事業の發展に向ひて努力をなし居れり。

にても殆んど無量なるを以て、事業の擴張發展は何等顧慮する處なく實行し得るなり。

建築物としては製材工場の外に倉庫一棟、乾燥場一棟、事務所一棟等ありて建坪總數二百五十坪なるが、土場は約一町歩餘ありて飯澤川に臨み、製材原料は郡内に於ける民有林より仰きつゝありて、其の種類は杉、アナ、其他の雜木なるが、是等の資材を運材するには總て飯澤川を利用し、土場の前を流るゝ河身に矢來を設けて留材装置とし木材を上流より流下するを以て多大の努力と運賃を節減し得るに依り、製品も亦隨つて比較的低廉に出来上り、加ふるに材料は工場附近の森林のみ

製品の種類は齒板を主とし齒板及び板割等なるが、一ヶ年の製材高は一萬二千石の資材を消費して齒板約二萬坪を製出し、其の殘餘は齒板及び板割等にして、齒板は殆んど全部を大阪に移出し、齒板は靜岡縣に出し、板割は大部分を東京方面に販賣しつゝありて、製品は荷馬車を利用して湯澤驛に搬出して各仕向先に移出し居れり。尙ほ製品の木屑を利用して炭札を製造しつゝ、あるが、其の産額一ヶ年三十萬枚に及ぶ。斯くの如きは價格に於ては大ならずと雖も、廢物利用としては又た好適たるを失はざるなり。

縣内に於ける製材工場は大小を通じ六十個所を算するが、其の大部分は杉製板を主としつゝありて而して縣内に於て杉の蓄材積六千七百萬石を算すと雖も、其の伐採量に於ては一定の制限ありて製板事業の擴張に關しては勢ひ同業者間の競争あるを免る可らずと雖も、雜木利用工業に於ては其の材料にして何等其の發展上に於て競争あるなく、資材の購入殆んど意の如くなるを以て、雄西製材所の如きも今後益々發展を見るに至る可く、殊に經營者石垣氏は斯業に關する經驗を積み、頭腦明晰にして能く其の計劃を誤まらざるを以て、其の前途や多望なりと謂ふ可し。

秋田林業株式會社

秋田林業株式會社は合名會社鈴木商店經營事業の一部に屬し、各地に於て此の工業を實行せ

る内の一にして、其の資本金拾萬圓の株式組織とし、重役は鈴木商店使用人中より撰任して事業の經營を全然一任し、資金關係等に至りては各當事者の意見に依り自由に發展せしめ、後援するの組織なり。然して本店は大阪南區順慶町三丁目に在りて、社長松田茂太郎氏、専務取締役松嶋誠氏、支配人辻辰太郎氏、技師長雪山彌一郎氏等經營の任に當り居れり。而して工場は秋田縣仙北郡生保内村に在りて、醋酸石灰の製造を主とするが、第一計劃としては駒ヶ嶽山林三千五十町歩を生保内村より二十ヶ年の地上權を附して買收せり。

其の伐採計劃は駒ヶ嶽三千五十町歩の内、立木地は二千町歩にして、此の蓄積材量二十四萬坪(二坪は百二十六立方尺にして小割材とす石敷に換算すれば十二石なり)に達し、一ヶ年の使用量九千二百四十坪の豫定なり。此の内原料材五千二百八十坪、燃料材三千九百六十坪にして一ヶ年の伐採面積は十四町歩の豫定なるが、此の伐採跡地は現在契約年限を延長する交渉中にして、約成りし上は鈴木家の世襲財産となすの計劃なり。其の第二計劃としては未だ調査の歩を進め居らざるも、將來有望なる所ならば本縣に計りて擴張計劃を立つる方針なりといふ。

其の創立して事業を開始したるは大正五年十二月にして、創立後日淺きを以て事業の成績を云爲するは早計に似たるも、今日迄の經營状態を見るに着々として事業進捗し、最初職工及常備七十餘人に過ぎざりしもの、現今四百名を越ゆるに至り、主として豫後備軍人を採用して萬

事軍隊的組織となし、各班長の下に分屬せしめて秩序整然たるものあり。更に其の設備に到りては建築物類總計一千九百餘坪にして、乾溜電總計二十四臺を有し、木醋蒸溜機は銅製十石入六臺にしてタール脱酸機二臺、木精分溜機銅製十七石一臺、木精々製機二臺、醋酸石灰蒸發盤多管式十五石入二臺、醋酸石灰乾燥機六臺等を据付けあり。原動力としては百二十五馬力の汽機一基を備へ、點火用發電機(五基ワット)一臺及び分析器一式を設置し、運材の設備としては木桶を作りて流下し、夫れより輕便軌道(二千八十間)を敷設して運搬に使せり。

是等の設備費には總計拾七萬圓餘を要し、資本金を遙かに超過せるが、株式超過額は鈴木商會よりの融通金を以て之れに充當し、運轉資金は總て鈴木本店より同店經營の大阪林産物共同販賣所(大阪南區順慶町三丁目)を經由して任意供給する制度なり、斯くの如く巨萬の富を有する鈴木商會の經營する所にして、資金充實し、材料又豊富なるを以て、經營上何等懸慮する處なく勇往邁進し得るに依り、本事業の成功するや疑ひを容れざる處なり。而して同會社一ヶ年の生産高は醋酸石灰十一萬六千六百六十貫、木炭四十七萬五千二百貫、木精十九萬八千封度を算す。其の事業の如何に大規模にして生産力に富めるかを察知するに餘りありと謂ふ可し。製品の販賣に關しては、其製產品の全部を大阪林産物共同販賣所に於て引受け、同所の手に依りて内は各醋酸製造者に供給し、外は南洋、印度、濠洲及び遠く英本國に輸出せられつゝあ

一八六
るが、將來外國品との生産費比較上、優に競争の餘裕を有し居るを以て、戦後においては大に發展すべく豫期せらる。尙ほ本店の鈴木商會に於ても此等の製品を原料とする工業の企劃中に屬するを以て、其の前途の發展や期して俟つ可きなり。

本縣内豊富なる湖葉樹林を有するに拘らず、雜木利用工業は頗る不振にして、無盡藏なる樹林は其の開拓を俟らつゝあるの時に際し鈴木商會の手に依りて、秋田林業株式會社の創立せらるゝに至りしは縣國の爲め慶賀に堪わさる所にして、秋田木工株式會社と共に本縣に於ける雜木利用工業の双壁と稱すべし。吾人は切に將來の健全なる發達を切望して歌まざるものなり。

各種木材木炭輸出業

秋田縣角館町西濱土場前

澤口朝治

電話掛圖 十 八 番

電信略號 (サ) 又は (ア)